

# 歴史を語る建物たち

庄内編  
(第4回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 有限会社寛明堂（鶴岡市）



鶴岡駅前を直進し、右折して山王通り商店街に入っすぐのところに、昔ながらの風ぼうを残す写真館がある。明治6年創業の寛明堂で、奥の2階建ての建物は、大正9年に建てられた木造建築、手前の3階建ての建物は、昭和9年に増築された鉄筋コンクリート建築である。増築部分は荒武祐幸の設計で、山王通りには、荒武が昭和初期に設計した旧・紅繁洋品店も現存している。

### 絵心のある初代が趣味で始めた

庄内藩の下級武士であった加藤正寛は、明治元年、戊辰戦争で敗北した責任により、東京での謹慎を命じられた庄内藩主・酒井忠篤に随伴して上京した。

もっとも、謹慎といっても行動は比較的自由だったため、暇つぶしに横浜の写真館に立ち寄った正寛は、たちまち写真のとりこになった。元来絵心があり、また人一倍勉強家であった正寛は、みるまに写真の技術を磨き、庄内に戻った明治4年、間借りしていた柳務寺において、希望者の写真を趣味で撮るようになった。それが評判となり、明治6年、長山小路（今の鳥居町）

に写真館を開業した。しかし、長山小路は低地でたびたび水害に見舞われたため、大正時代に現在の場所に移転した。

なお、正寛は屋号を「寛楽堂」とし、2代目は「寛明堂」、3代目は「寛園堂」と名乗るように遺言を残



長山小路（今の鳥居町）に店舗があったころ、川の氾濫で庭が水没した。わざと人物にポーズを取らせたのは、当時のしゃれ心だろうか。写真所有：有限会社寛明堂

したが、代ごとに屋号が変わるのは良くないとのことから、3代目以降も「寛明堂」を踏襲し、現在に至っている。現在の加藤賢代表は6代目にあたる。

### 昔も今も変わらぬ信頼性

平成27年1月27日、寛明堂に一通の電子メールが届いた。相手は宮内庁であった。当時、宮内庁では、三の丸尚蔵館にて展覧会「明治天皇 邦を知り国を治める 近代と国見と天皇のまなざし」を開催していた。その中で、明治時代の鶴岡松ヶ丘開墾場の写真を展示していたが、これは、明治41年9月に皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）が山形県に行啓された際に献上された写真であった。そして、全15枚のうち、4枚の台紙に「寛明堂製」と印字されていたことから、そのことを知らせるべく、寛明堂のホームページを見て連絡してきたそうだ。

しかし、こうした“時代の記録”は、寛明堂が100年以上にわたって撮り続けてきた写真の一部であり、むしろ撮影の中心は、地域に住む人々の日常であった。結婚式を自宅で行うことが普通であった時代には、重たい機材を持って現地まで赴いた。また、戦時中は、出征する兵隊の姿を“命の証”として写真に収めた。

こうして、写真は祖父母の代から父母の代、そして子どもの代へと継承されていく。加藤代表は、「地域の方との長年のお付き合いの中で信頼性が築かれていくからこそ、この店が地域に残り、この場所に存在する意味があるのです。昔も今も、根底に流れる人々の気持ちや、商売を続ける私たちの基本的な姿勢は変わりません」と話す。

専務の典子夫人も、「生まれてからお亡くなりになるまで、お客さまが何度写真館を訪れ、あるいはご利用されるかはわかりません。ただ、たいていは七五三や新社会人など、人生の節目、大切なライフイベントの時です。ですから、私たちは常に、お客さまにご満足いただける写真を提供する責任があると感じています」と続ける。

### もしかしたら壊していたかも？

話を建物に戻そう。平成元年、寛明堂は大規模なリニューアルを行ったが、加藤夫妻に建て替える発想はなかったという。「（建て替えても）今よりいい建物はできないだろうと思いました」と加藤代表。それには、リニューアルの相談をしていた設計士の意見も大きかったという。

一方で、建物の使い勝手が悪いことに悩んでいたことも事実であった。典子専務は、「もし、設計士の方から『壊した方がいい』と言われたら、そのようにしていたかもしれません」と打ち明ける。

なお、その設計士は新潟の方で、まちおこしにも熱心に取り組んでいた。結果として、外観はほぼそのま

まにリニューアルを行った寛明堂は、平成3年に鶴岡市の都市景観賞を受賞し、今では、地域のシンボルとしての存在感を十分に発揮している。

「ここまでシンボリックになるとは思いませんでした。あの時の設計士の方には先見の明があったのだと思います」と加藤代表は驚きを隠さない。

近年では、外国人研究者が調査に訪れるほか、NHKや全国紙、地方紙なども取材に訪れるそうだ。「歴史的な建物だからということもあると思いますが、同じ建物で同じ商売を続けている“老舗”としての一面も、注目いただいている理由かもしれません」と語る典子専務は、いささか誇らしげであった。

### 写真業と建物は残したい

今日では、スマホなどで誰でも簡単に高画質の写真が撮れる時代になり、寛明堂では新規客の獲得にも余念がない。「『老舗の写真館は敷居が高い、料金が高い』というイメージをまず払拭したい」（加藤代表）と、ホームページやチラシ、広告、キャンペーンなどでの情報発信に力を入れている。「伝統を守るだけでなく、技術を新しくしていくことも重要」と加藤代表は話す。

その営業方針は、地域の信頼を得て数多く手掛ける学校の卒業アルバム作成にも表れており、平成22年度には、「日本商業写真協会スクールアルバムコンテスト」の中学校部門で、最高となるアルバム大賞（櫛引中学校）に輝いた。

最後に、「この店を、そのまま7代目に継がせたいか」と尋ねたところ、「そこまでのこだわりはありません」（典子専務）と、意外な答えが返ってきた。

「写真業と、この建物を残してくれれば、あとは7代目の自由に任せます。極論すれば、建物をどこかに移築して、新しい建物で写真業を始めてもいいと思っています」とほほ笑む典子専務の言葉からは、むしろ、写真業という商売と、歴史的建造物である建物に対する、一方ならぬ愛情が伝わってきた。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）

写真機にシャッターがなく、レンズの開閉で撮動機が最短でも一分間は身動きがでなかった。それゆえ、「首押さえ」と呼ばれる機器で上体を支えることもあった。（写真は筆者。撮影は加藤典子専務）

